

中学生 被災地を駆ける



東日本大震災の発生から10年。「今できることプロジェクト」は本年度、「次世代への伝承啓発」に力を入れ、新たな企画を実施しました。具体的に取り組んだのは、震災当時はまだ幼かった中学生に被災地を訪ねてもらい、あの日の時何があったのかを学びつつ、復興のいまを自分の目で確かめ、発信してもらう企画です。本特集は参加した仙台市立五橋中学校、東北学院中学校、宮城学院中学校の3中学校の生徒42人が記者となって被災地取材に挑戦し、それぞれの視点で記事にまとめたレポートです。震災の記憶と教訓を、世代を超えて明日へ。学校で家庭で職場で一読いただき、伝承のバトンをつないでいただければ幸いです。

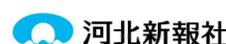
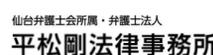
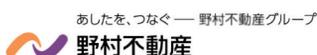
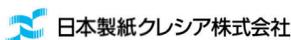
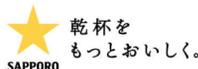


私たちが、復興のために「今できること」をともに考え、このプロジェクトを推進していきます。

河北 今できること

検索

facebookページもあります。



◎後援／宮城県、仙台市、石巻市、名取市、松島町、七ヶ浜町、南三陸町、宮城県市長会、宮城県町村会、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会 ◎協力／一般財団法人 3.11伝承ロード推進機構

今できることプロジェクトとは...

東日本大震災の翌年2012年より、震災の伝承や啓発、風化の防止を目指し取り組んでいるプロジェクトです。毎年、読者と賛同企業と河北新報社と一緒に「何ができるか」を考えアクションしており、真の復興を果たすまで継続して取り組んでまいります。



仙台市立五橋中学校
仙台市青葉区五橋2の2の1
生徒 638人
校長 佐藤 正幸

大川小は未来拓く場所

語り部・佐藤さん「決断と行動力で命守って」



震災遺構として整備が進められている大川小学校の前で、佐藤さんの話に聞き入る五橋中学生

私たち、仙台市立五橋中学校の1、2年生10人は、昨年10月24日に石巻市内で取材を行いました。閉校した石巻市立大川小学校を訪問し、「大川伝承の会 共同代表・佐藤敏郎さんの語り掛けに耳を傾けました。同市雄勝町の「雄勝ローズファクトリーガーデン」では徳水博志さんから話を聞き、緑あふれるガーデン内を散策しました。また一般社団法人「フィッシャーマン・ジャパン」代表理事でワカメ漁師の阿部勝太さんから、海洋環境の問題や、若手漁師の育成について説明を受けました。

【2年三浦颯太、1年泉田百合香・松井奏絵】

私たちはまず最初に大川小学校を訪れ、大川伝承の会共同代表の佐藤敏郎さん(67)に話を聞きました。海から3・7km離れた大川小には震災時、高さ8・6mの津波が襲い、児童と教職員合わせて84人が犠牲になりました。現在は被災した丸い形の校舎が残っていますが、周囲に住宅はなく、工事車両などが行き交う殺風景な印象でした。「震災前は家が並び、店も病院も郵便局もあって、子どもたちは走り回っていました。そんな様子を想像してくださいます」と佐藤さんは静かに語ります。

並べられ、その1人でした。佐藤さんの妻が娘の名前を呼ぶと、目から涙が流れたように見えました。あの日、地震が起きてから約50分の間、子どもたちは校庭に立ちまわった。裏山でなく北上川に向かつて避難を始め、わずか1分後に津波にのまれましました。佐藤さんは「避難する時



雄勝ローズファクトリーガーデンの裏山に登り、津波が到達した高さからガーデンを見下ろす五橋中学生

希望の花が咲く楽園

雄勝ローズファクトリーガーデン 徳水さん 行動起こす大切さ説く

【2年高松優奈・遠藤はる香、1年奈良悠生・小久保寿龍】 私たちが次に向かったのは、石巻市雄勝町の「雄勝ローズファクトリーガーデン」。一度全てを津波に壊された地に広がる、花と緑と日の光に包まれた光景は

「小さな楽園」のようでした。ガーデンのこれまでと今後について、徳水博志さん(67)に話を聞きました。震災の津波で、徳水さんの妻の実家が流され、母親や親戚が亡くなりました。命を救えなかった自責の念に押しつぶされかけた佐藤さんに、美しい花が咲きました。これをきっかけに、楽園

の敷地に母親が好きたかったホオズキとナデシコを植えました。そこに支援活動をしてきた千葉大学の学生さんが偶然通り掛かり、チューリップの球根を植えてもらったことになり、震災翌年に美しい花が咲きました。これをきっかけに、楽園

想定外にも対応して避難を

一番心に残っているのは、佐藤敏郎さんが話された「大川小学校は確かに悲しい場所ではあるが、未来を拓く場所である」という言葉です。自分を含めて若い人たちが震災を語り継ぎ、災害が起きても誰も悲しまない社会を作っていくべきだと強く感じました。そのためには、地域ぐるみで避難訓練をしたり、日頃から家族で話し合ったりして、防災意識を高く持つことが大切だと思いました。

三浦 颯太 2年

母に話すと「家族で避難場所を決めておくことなども大切だが、想定外のことが起きるかもしれない。自分の判断で行動し、自分の身を自分で守れるようになってほしい」と言われました。いざという時に自分で考えて行動できるように、防災意識をさらに高めたかったです。あの日大川小で起こったことを自分のこととして捉えて、後世に伝えていくことが、私の「今できること」だと思います。

「甘い考え」やめて命を守る

今回の取材を通して、みなさんに一番伝えたいことは「自分も、大切な人も、みんな災害に遭う可能性がある」ということです。佐藤敏郎さんはこう話されていました。「自分やあなたの大変な人が、災害にあったらどうするかを考える。これが想定です」と。私は今まで、自分は大丈夫だろう、家族は大丈夫だろうと考えていましたが、その甘い考えでは大切な人を救えない。このこと

高松 優奈 2年

を強く感じました。私は取材後、大地震が起きたことを想定して、自分は地震が起きても本当に大丈夫か、家族がいる場所は本当に安全なのかという点について、家族と話し合いました。これを読んでいるあなたも、あなたの大変な人も決して例外外ではありません。いつ起こるか分からない災害。今からしっかり「想定」をして、命を守るための行動を一緒に考えていきましょう。

大震災を「自分事」と捉えて

佐藤敏郎さんのお話を伺って、「どんな瞬間も当たり前ではない」と強く感じました。かつて大川小学校で子供たちが遊び、笑った「当たり前」の日々は、震災で奪われてしまいました。「恐ろしいのは津波ではなく、油断や忖度をしてしまう自分自身の心です。佐藤さんの言葉にハッとさせられました。私は震災への恐怖心から、自分や自分の大切な人が被害を受けたら」ということ

遠藤 はる香 2年

を考えたことはありませんでした。しかし、想像することで救える命はたくさんあります。震災を自分事と捉えることが大切だと思いました。取材を終えて、私は家族と「震災が起きたらどんな行動を取るべきか」「どこに集合するか」を話し合いました。私たちの明るい未来を切り開いていくためにも、震災を他人事だと考えずに、ぜひあなたの大切な人と話し合ってください。

被災地に行き震災を感じて

私は取材を通して、震災は絶対に風化させてはいけないと、あらためて強く感じました。私は取材前、被災地を自分の目で見たことがほとんどありませんでしたが、実際に行ってみると、画面越しでは知ることができなかった迫力や悲しさを肌で感じる事ができました。大川小学校では、震災前の学校の様子や子どもたちの写真を見て、目の前の光景との違いに言葉を失いました。「今

泉田 百合香 1年

は『あの大川小』と言われているが、震災前は普通の小学校だった」という佐藤敏郎さんの言葉が、今も心に刺さり続けます。悲しい出来事を風化させないためにも、この経験を身近な人たちに伝えていこうと思えました。今この新聞を読んでいるみなさんも、ぜひ被災地まで足を運び、震災というものを感じてほしいです。そのようなことに関心を持つだけでも、風化を防ぐことができると思います。

「諦めない心」が未来を開く

今回の取材で「諦めない心が未来を開く」ことを学びました。語り部の佐藤敏郎さんにお話を伺い、私の中でイメージする「震災」が変わったからです。私は、震災はとてつもなく悲しく、つらくて、大切な人を亡くした人は立ち直れないと思っていた。しかし、それは大きな思い込みでした。今回お話をいただいた佐藤さん、雄勝花物語の徳水博志さん、漁師の阿部勝太さんの3

小山田 陽輝 1年

人は、どんなにつらいことがあっても諦めず、前向きに捉えて、今回の結果をどのように次に生かせるかなどを考えて、未来を切り開いていました。私の中の「震災」のイメージが悲しい、つらいから、「前向きに生きている」という明るいイメージになりました。今回の経験を生かして、部活などで忙しいと感じた時でも、逃げたり諦めたりせず、前を向いて挑戦していきたいです。

前を向き続ける大切さ学ぶ

漁師の阿部勝太さんのお話を伺い、前を向き続けることの大切さを実感しました。「3・11」は沿岸の町を破壊し、大勢の命を奪いました。水産業も例外ではなく、船や道具のみならず漁師の人たちの心をもさび付かせました。そんな中「水産業を未来に残そう」と阿部さんが「フィッシャーマン・ジャパン」を立ち上げ、若い漁師の育成に取り組んでいます。漁師になるのが難しい「壁」を壊そ

うと、体験教室なども行っています。私は阿部さんが震災を経てもなお、水産業の復興に向けて努力し続けていることに尊敬の念を抱きました。日本は周りを海に囲まれているので、私たちの生活と海は密接に関わっています。日本の水産業が衰退しているのは、とても残念です。まずは海のいとも悪い面もどちらも知ることで、水産業の復活につながるのではないでしょうかと思います。

海の汚染や漁師減 課題 フィッシャーマン・ジャパン 阿部さん



十三浜の漁港で、海洋問題や漁業を取り巻く環境を丁寧に解説する阿部さん

若手育成に力

【2年赤間紗桜・伊本怜生、1年小山田陽輝】 最後に向かったのは、石巻市北町の十三浜。ワカメの養殖をしている漁師の阿部勝太さん(35)に海洋環境問題について教えてもらい、塩蔵ワカメの袋詰め体験をしました。阿部さんは「海が汚れ、海水温が上がって魚が取れなくなる」と、魚を取

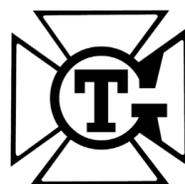
る漁師が減っていることの一つが、私たちの食卓にも影響する大きな問題だと指摘します。具体例の一つは、マイクプラスチックによる海の汚染です。ペットボトルやごみ袋などが目に見えないほど細かくなったもので、海に生息する生物が飲み込んでしまい、それを私たちが食べることで、私たちの健康に悪影響がある恐れがあります。

二つ目は地球温暖化による海水温の上昇です。海水温1度の上昇は、気温の10〜15度上昇に匹敵するといわれ、近年のサンマやサケ、イカなどの不漁の関係しています。さらに魚が捕れず残ったものの理由から、漁師を始めたかと思えることからも魚が食べられるよう、漁師が増えるべく、カックよく、稼げる仕事を願っています。

【2年】三浦颯太、高松優奈、遠藤はる香、伊本怜生 【1年】泉田百合香、松井奏絵、奈良悠生、小久保寿龍、小山田陽輝

わたしたちが作りました

東北学院新聞



東北学院中学校

仙台市宮城野区小鶴字高野
123の1
生徒 466人
校長 阿部 恒幸

地震・津波 甘く見ないで

南三陸・三浦さん「自然の恐ろしさ伝え続ける」

僕たち東北学院中学校の1・3年生15人は、昨年10月31日に宮城県南三陸町で取材をしました。津波が押し寄せた南三陸町立戸倉中学校(現在は閉校)の校舎前で、当時2年生だった三浦貴裕さんに話を聞きました。志津川湾を望む高台にある「海の見える命の森」では、現場責任者の阿部寛行さんから説明を受けた後、カエデの苗木を植樹し、石窯でピザ作りにも挑戦しました。最後に入谷地区の宿泊研修施設「いりやど」を訪れ、震災時に救援活動を行った元消防団副団長の阿部博之さんにインタビューしました。

「3年熊谷虎汰郎・藤原飛羽、2年柴田光・菅原夏弦、1年平山昊」
海抜20mの高台に建つ旧戸倉中学校。志津川湾を一望するこの場所で、めがねを掛けた男性は当時を振り返りました。「あの日、ここまで津波は来ないだろうと思っていました。南三陸研修センターのスタッフ三浦貴裕さん(24)は、生まれ育った南三陸町で震災の経験を後世に伝える語り部活動をしています。ここは海岸から100mほどですが、海面はほろ

下。とても津波が来るような場所には思えません。しかし現実とは違いました。津波は建物1階を水没させる22・6mに達したのです。震災当時、三浦さんは戸倉中2年生。卒業式の準備を終え、帰りの会をしながら教室で激しい揺れに襲われました。他の在校生と一緒に校庭に避難しているとき、「山さ逃げろ」。異変を察知した先生の叫び声で無我夢中で真山に駆け上がり、間一髪で命拾いしました。振り返ると、海面が信じ

られない高さになっていて、校庭は完全に水没。三浦さんは「これは夢なのかと思った」と言います。車も流される勢いでした。残念ながら逃げ遅れた人もいました。溺れて意識を失った男性に三浦さんは入

工呼吸や心肺蘇生を試みましたが、しかし願いはかなわず。帰らぬ人に三浦さんは「自然の恐ろしさをあらためて痛感した」と唇をかみまです。このように悲劇を二度と繰り返さないために、自分に何かできることはないか。進路を考えた三浦さんは、地元で語り部活動をすることを決意。大学卒業後の2019年4月から今の仕事をしています。語り部活動では自分の体験を説明しながら、津波から身を守るためには避難が

重要なことや、災害を意欲して日頃から備えておくことの大切さを訴えています。「自然を甘く見てはいけません。思いの詰まった自宅はもちろん、大好きな祖父や祖母まで失った三浦さんの切実なメッセージです。」

人命救助内陸から応援

入谷消防団 元副分団長・阿部さん

【3年小林諒真、2年青沼 怜・伊藤琉音、1年坂井隆 一郎・藤原温剛】

入谷地区は唯一、津波被害を受けなかった。津波被害を受けた南三陸町にある4地区で、海に面していない

入谷地区は唯一、津波被害を受けなかった。津波被害を受けた南三陸町にある4地区で、海に面していない

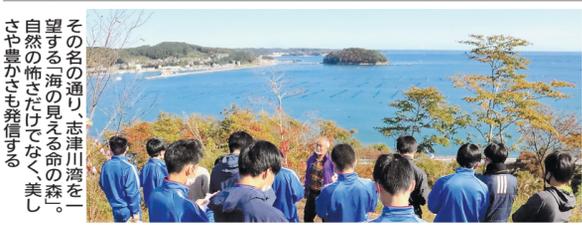
入谷地区は唯一、津波被害を受けなかった。津波被害を受けた南三陸町にある4地区で、海に面していない

入谷地区は唯一、津波被害を受けなかった。津波被害を受けた南三陸町にある4地区で、海に面していない

楽しく体験 減災学が

南三陸・整備進む「海の見える命の森」

津波発生時は避難目標に



【3年菅場隆甫、堀内千凜、2年熊谷孝太郎、1年川元 琉星・庄司宏知】
震災の津波で浸水した国道45号から山道を登ること5分。目の前に青く輝く志津川湾が広がりました。南三陸町地区の丘で整備が進む「海の見える命の森」。震災の犠牲者を悼む鎮魂の地でありつつ、日頃

国内外から集まった延べ6000人のボランティアの手が進められてきました。現場隊長を務める副実行委員長の阿部寛行さん(59)は、「この森に多くの人が関わることによって、震災の教訓が広く伝わる。同時に楽しみながら生きることを学んで、それぞれの生活の中で備えたい」と願っています。

話します。阿部さん自身、震災後にボランティアとして支援に携わったことが縁で仙台市から移り住み、活動をけん引しています。森には「命の木」としてエドヒガンザクラが多く植えられています。樹齢が1000年を超えることもありますが、津波の心配のない高台に植え、津波襲来時には避難目標として、世

紀を超えて根付いてほしいとの掛けです。山頂には石碑があり「伝えよう千年万津波でんでん」と刻まれています。おのおのが互いを信じ合、いばらばらに避難することこそが、津波犠牲性を避ける鉄則だと語っています。今回、僕たちは森にカエデの苗木3本を植えました。災害時には風雨をしの

げる屋根付きの展望テラスで、昼食に石窯で焼いたピザもいただきました。眺望を楽しみながら震災のことに思いをはせ、サブイパルのノウハウも学びながら楽しい時間を過ごしました。新型コロナウィルスが心配な状況ですが、広々とした森なら安心です。家族や仲間と、一度足を運んでみてください。

わたしたちが作りました
【3年】菅場隆甫、熊谷虎汰郎、小林諒真、藤原飛羽、堀内千凜
【2年】青沼怜、伊藤琉音、熊谷孝太郎、柴田光、菅原夏弦
【1年】川元琉星、坂井隆一郎、庄司宏知、平山昊、藤原温剛

災害時まず自分の命を守る



僕は今回のプロジェクトで一番印象に残っているのは、取材させていただいた方々全員が「自分の命は自分で守ることが大切だ」と言っていたことです。震災のような災害が起きたら、まず周りの人を助けたいと思っていた僕はとても驚きました。しかし、よく考えれば分かることです。まずは自分の安全を確保した上でないと、僕を助けるために誰かが危険を冒すことになりかねない

菅場 隆甫 3年

いからです。だからやはり、もし災害に直面したら、自分の命を第一に考えたいと思います。震災を体験した人から、その内容や苦労をじかに聞くという今回のプロジェクトは、初めての貴重な経験でした。実際に南三陸町を訪れ、被災直後に比べて確実に復興へ向かっていることも知ることができました。現地ですんだことを、たくさんの人に伝えたいと思います。

「当たり前」の日常に感謝を



日常が幸せだと思い感謝すること。皆さんは忘れていませんか。私たちは当たり前のように毎日食事ができ、当たり前のように寝る場所があります。でも震災当時、被災地で何ん自由なく生活していた人はいたのでしょうか。ほとんどいなかった僕は思います。僕は今回の取材で南三陸町に行き、感じたことがあります。それは地元の方々のほとんどが、いつも笑顔だったと

藤原 飛羽 3年

いうことでした。家族や友人を亡くしても、昔からの故郷が変わってしまっても、今、自分の命が続いていることに最大限の感謝をしようという心持ちから湧き出る笑顔だと、僕は感じました。何かを失ったとき「もったいない」と後悔をしないために、目の前に与えられているものに感謝することが、私たちに「今できること」ではないかと現地を訪ねて思いました。

「身の守り方」知って備える



災害などの非常事態時に、自分の安全を確保した上で人を助けることの大切さを学びました。今回お話をいただいた方々は、何らかの形で他人の人を助けようとしていたのですが、前提として自分の身の安全を確保することが大切だとおっしゃっていました。なので、まずは他人に頼ることなく、一人一人が自分の身を守ることを災害時の大前提なのだと言っていました。僕らの世代だと震災のこ

小林 諒真 3年

とをはっきりと覚えている人はまれで、自分の身の守り方を熟知している人は少ないと思います。同世代に被災地で学んだことをしっかり伝えて、いつ起こるか分からない災害に対応できるようにしていきたいです。今も大変なコロナ禍ですが、まずは自分が感染しないように努め、コロナと最前線で戦っている医療関係の方々を支援することが最善の行動だと思います。

災害発生後に慌てても遅い



今回の取材を通して学んだこと、そして周囲に伝えていきたいと思ったことは「災害が起こってから慌てては遅い」ということです。お話を聞いた方々は皆「自分の身は自分で守ることが大切」とおっしゃっていました。そのために、例えばラジオや非常食を携帯するなど、一人一人が平時からできることをしておくことが重要だと学びました。こうした備えをしておくことで、いざという時、自分が

青沼 怜 2年

助かるだけでなく、誰かを助けることができます。また高い防災意識を持てば、津波などから逃げ遅れることを防ぐことにもつながります。僕は今回の被災地訪問で、これまでの自分の生活がいかに平穏で幸せだったか知りませんでした。防災用品をまとめた「防災バッグ」を持ち歩くことなど、自分でもできることを実践しながら、備えの方法を周囲に広めていきたいと思いました。

忘れてならない自然の怖さ



僕が今回の南三陸町取材を通じて思ったことは二つあります。一つ目は「自然の恐ろしさ」です。災害はいつどこで起こるか分からない上に、一瞬で多くの命を奪います。実際、震災でも多くの人が犠牲になり、行方不明になっています。自然の怖さを忘れてはいけません。二つ目は「日常のありがたさ」です。今回取材した被災者の皆さんは、口をそろえて「あらためて日常が幸せだと

平山 昊 1年

感じた」と訴えていました。災害でいつも通りの暮らしが奪われて、初めてその価値に気付かされるのは皮肉なことですが、お話を聞いて、あらためて納得させられました。僕は今回の取材を通じて「自然の恐ろしさ」と「日常のありがたさ」を忘れずに、同時に後輩たちにも伝えていきたいと思いました。

募金足掛かりに被災地支援



震災が起きた時、僕はまだ3歳でした。だから当時の記憶はほとんど残っていません。今回、南三陸町を訪れて震災を経験した3人の方にお話を伺いながら、「自分たちが今できることは何か」を考えました。僕はボランティア活動だと思いました。ただ、一口にボランティアといっても、活動内容は多岐に渡ります。それ故に、僕たち中学生にもできる分野があるのです。その一

藤原 温剛 1年

つは「募金」だと考えました。現地への移動手段がなくても、体力が十分でなくても、誰かの役に立てるからです。震災の被害に遭った地域では、今なお失ったものを取り戻すことができない人が多くいることを、今回の取材で知りました。募金を足掛かりに末永く、何らかのボランティア活動を続けていきたいと思いました。



